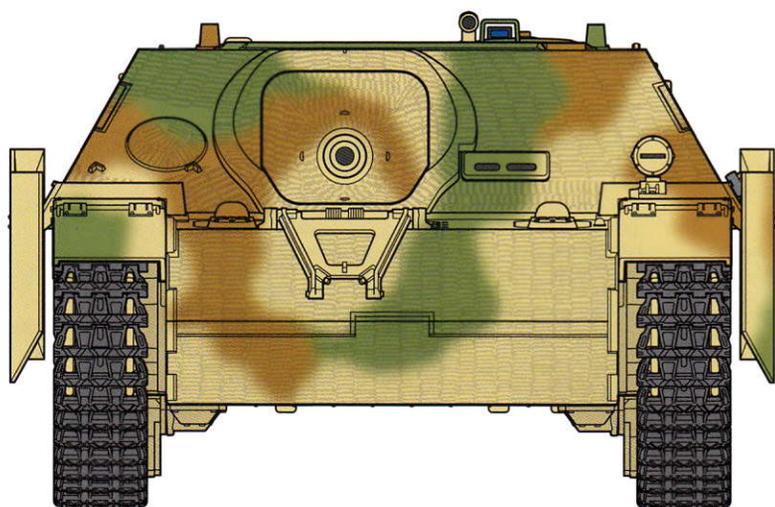
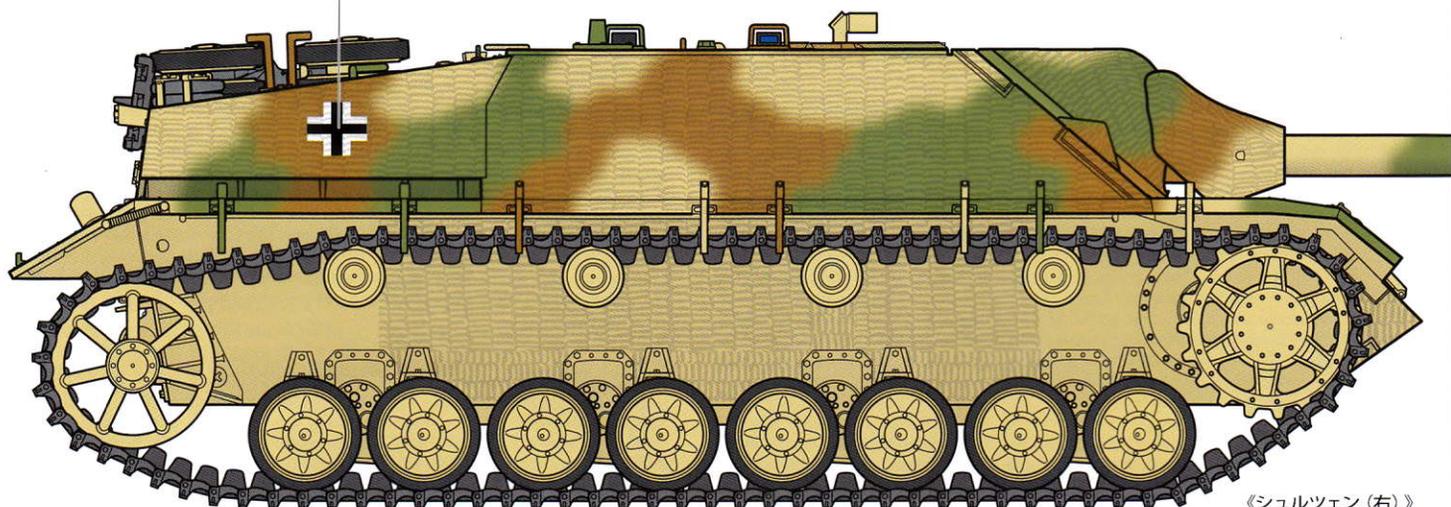


# JAGDPANZER IV /70(V) LANG (Sd.Kfz.162/)

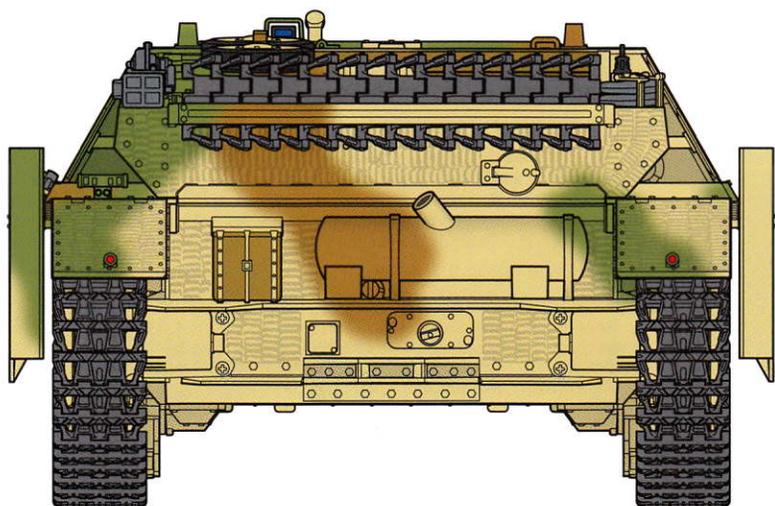
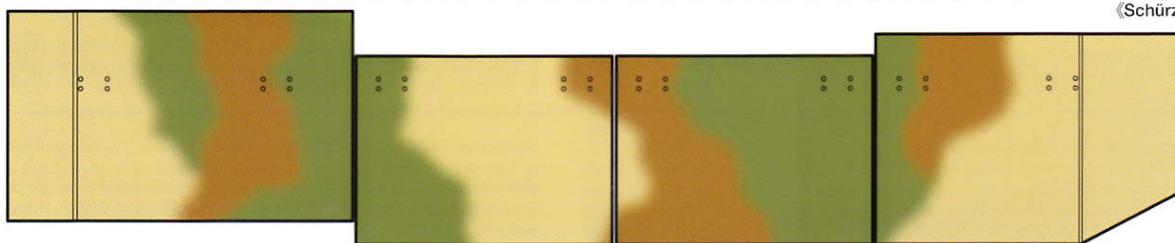
## GERMAN JAGDPANZER IV /70 (V) LANG



スライドマーク ①  
Decal

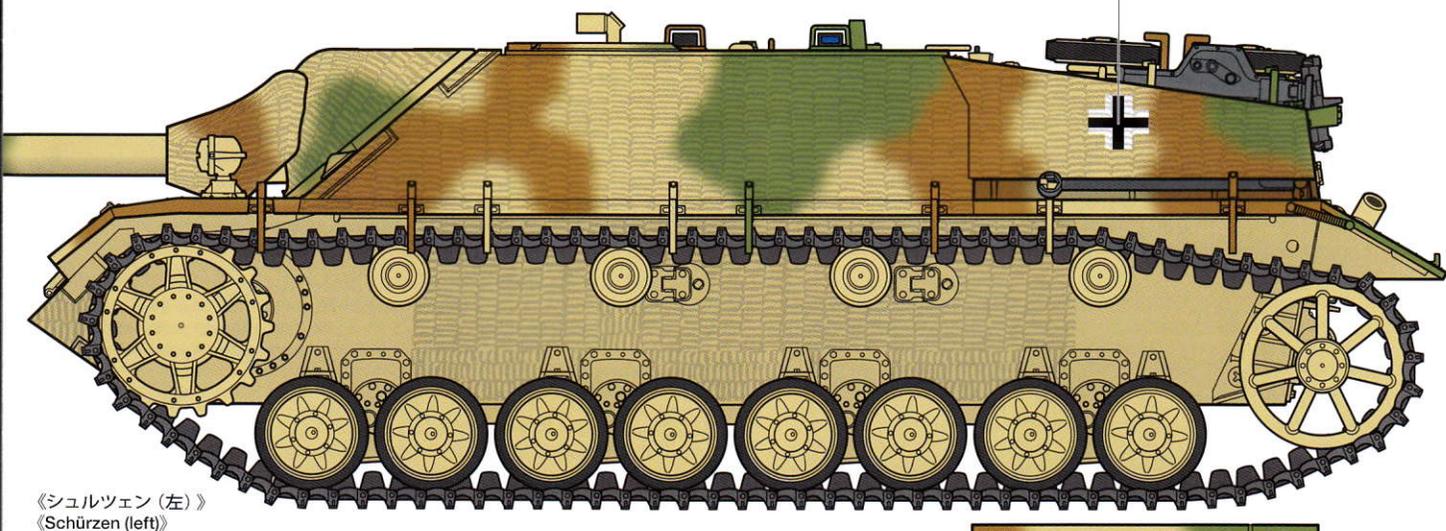


《シュルツェン (右)》  
《Schürzen (right)》

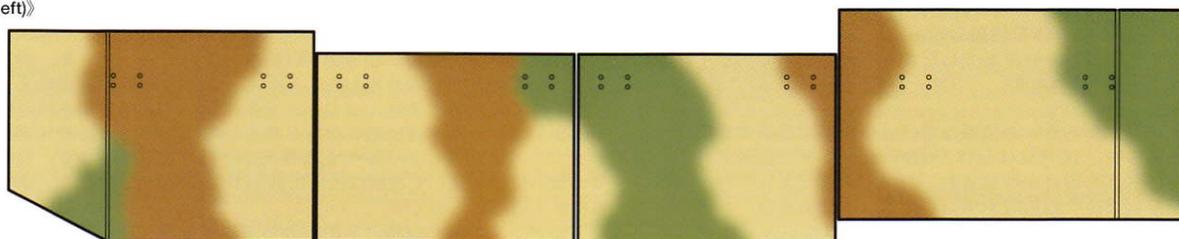


# 1) ドイツ IV号駆逐戦車/70(V) ラング

スライドマーク ①  
Decal



《シュルツェン (左)》  
《Schürzen (left)》



TS-1  
(XF-64) レッドブラウン  
Red brown

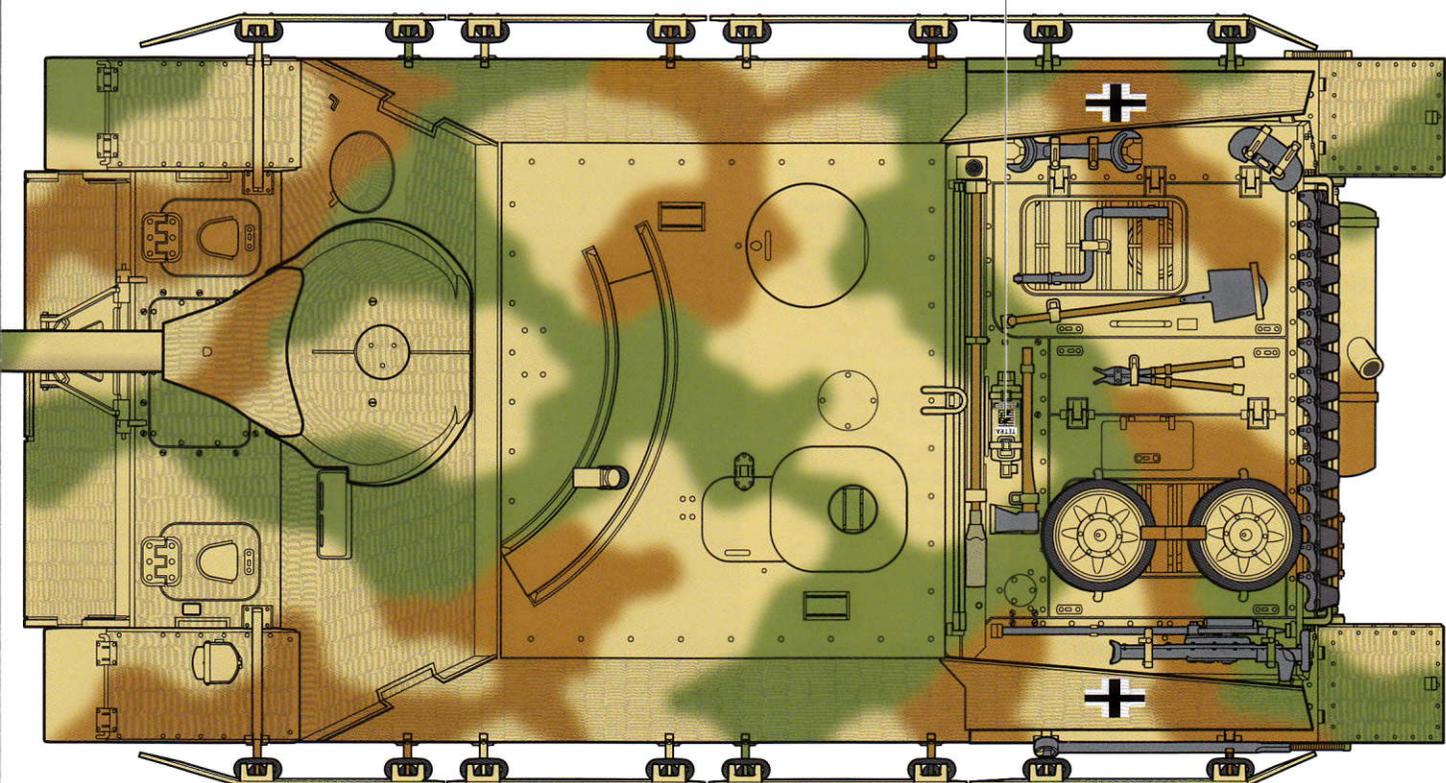


TS-2  
(XF-61) ダークグリーン  
Dark green



TS-3  
(XF-60) ダークイエロー  
Dark yellow

スライドマーク ②  
Decal



# ドイツIV号駆逐戦車/70(V) ラング

## ■突撃砲から駆逐戦車へ

第二次大戦初期、ドイツ軍は突撃砲（シュトゥルムゲシュツ）と呼ばれる車輛を開発しました。これは歩兵を支援する装甲車輛で、III号戦車の車体に固定戦闘室を設けて、戦車より大口徑の7.5cm砲を限定旋回式に装備していました。大口徑といってもその砲は榴弾砲で、装甲貫徹力はあまり高くはなく、主に敵陣地等を破壊するのが目的で、対戦車戦闘は二義的任務としか考えられていませんでした。長砲身を搭載し対戦車威力の高い突撃砲の開発は、着手はされたもののあまり真剣には進められていなかったのです。

しかし、独ソ戦が開始されると状況は一変しました。ソ連軍はT34やKV戦車という、ドイツ軍が予想もしていなかった強力な戦車を繰り出し、ドイツ軍はその対応に苦慮することとなります。こうした中で意外なまでの活躍をみせたのがIII号突撃砲でした。本車はそのシルエットの低さを活かし、主砲の威力の低さは戦術や成型炸薬弾の使用で補う等して、大きな戦果を挙げたのです。

こうしてドイツ軍では、III号突撃砲の長砲身化が進められることになりました。長砲身化が進められたIII号突撃砲は、1942年3月からF型の生産を開始。これらの車輛はいまや歩兵を支援して敵陣地を破壊するのではなく、敵の戦車を撃破することが主任務となりました。つまり長砲身化されたIII号突撃砲は、ドイツ軍で最初の駆逐戦車といえることができるでしょう。ただし、制式名称は変更されることはなく、これまで通り突撃砲のままでした。

III号突撃砲はF型からG型へと発展しますが、さらに軍は1942年9月に、当時IV号戦車の生産に携わっていたフォーク社に対して、IV号戦車の車体を用いて、III号突撃砲と同系列の48口径7.5cm対戦車砲Pak39を搭載した車輛の開発を求めたのです。フォーク社ではただちに車輛の設計に取り組み、1943年初めにはIV号戦車F型車体を使用したモックアップが完成しました。モックアップは車体こそIV号戦車のままでしたが、その戦闘室のデザインは後のIV号駆逐戦車とほとんど変わらない、スマートで先進的なものでした。

## ■IV号駆逐戦車の誕生

試作車輛は1943年5月にヒトラーの検閲を受け、IV号戦車そのままだった下部車体の設計が改められ、10月には試作2号車がヒトラーに展示されています。この車輛を基に各部の設計が改良され、1943年12月よりIV号駆逐戦車の生産は開始されました。なお当時本車の名前は、新型突撃砲、軽戦車駆逐車(IV)、IV号軽戦車駆逐車等がありました。本車が初めてIV号駆逐戦車（ヤークトパンツァー）F型と呼ばれるようになったのは、後のラングの生産開始後の1944年9月のことでした。量産車輛の引き渡しは1944年1月に開始され、1944年11月までに750輛が生産されました。

IV号駆逐戦車は基本的にIII号突撃砲と同様に、IV号戦車のベース車体に完全密閉の固定戦闘室を設けて、限定旋回式に武装を搭載。戦闘室の設計はIII号突撃砲に比べると極めて洗練されたもので、四面ともに傾斜した装甲板を組み合わせたスマートな箱型となっていました。下部車体は基本的に戦車型と同一でしたが、戦闘室をできるだけ大きく取るため、車体前面をくさび型に延長し、その部分に変速機を取ってスペースを確保していました。

装甲は前面60mm（後に80mmに強化）、側面40mm、後面30mmとなっており、良好な避弾開始のおかげで、特に前面の防御力は垂直に換算して110～123mmになるものとされています。主砲取り付け部も突撃砲とは異なり、前面装甲板に取り付けられた球形の防盾固定部に、ザウコフと呼ばれる避弾開始の良好な外装式防盾が組み合わされるようになっていました。これはそれまでの方式に比べて開口部が少なく防御性に優れ、砲架が前に突き出た関係で戦闘室内のスペースを大きく取ることが可能となったのです。

主砲はIII号突撃砲と同系列の48口径7.5cm対戦車砲Pak39。その貫徹力は通常の徹甲弾で、距離500mで96mm、1,000mで85mm、2,000mで64mmと当時としては充分なものでした（傾斜角はすべて60度）。なお砲口には射撃時の後座を減少させるため、III号突撃砲やIV号戦車と同様な二重式のマズブレキが装着されていました。しかし、これは後に特に車体前方に片寄った重量を減少させるために省かれています。それによる後座長の増加は、本車の場合は戦闘室が広がったために、問題にはなりませんでした。

## ■ラングへの発展

IV号駆逐戦車は、III号突撃砲やIV号戦車G型以降と同じ、48口径7.5cm砲を装備していましたが、実はその開発が決定した1942年9月、その主砲に当時開発が進んでいた70口径7.5cm砲を搭載することが検討されていました。しかし、このときはこうした変更がIV号駆逐戦車の生産を遅らせることと、48口径7.5cm砲が大量に使用可能だったのに対して、70口径7.5cm砲が充分供給されないことから計画は中止されました。

しかし1944年1月、ヒトラーも交えた会議の席で、IV号駆逐戦車への70口径7.5cm砲搭載の件が再度議論され、最終的に70口径7.5cm対戦車砲Pak42を搭載したIV号駆逐戦車の生産が承認されました。これを受けて4月にはIV号駆逐戦車F型を改造した試作車が製作され、1944年4月20日のヒトラーの誕生日に展示されたのです。これを見たヒトラーはこの車輛の生産に最高の優先権を与えました。しかし、軌道に乗りつつあるIV号駆逐戦車F型の生産を阻害しないように、実際にその生産が開始されたのは7月のことでした。

生産開始と前後して、ヒトラーは本車の呼称を、IV号戦車ラング(V)とする通達を出しました。(V)はフォーク社を意味しています。それ以外に本車には、IV号戦車/70(V)、IV号駆逐戦車ラング(V)といった名称が使用されました。本車の引き渡しは1944年8月から開始され、1945年3月までに930輛が完成しました。

ラングの車体は基本的にF型と同じで、主砲を70口径7.5cm砲に変更し、それに付随する諸装置を変更したものとイえるでしょう。主砲の威力は圧倒的で、通常の徹甲弾で、距離500mで124mm、1,000mで111mm、2,000mで89mm、あまり供給されませんでした。高速徹甲弾なら500mで174mm、1,000mで149mm、2,000mで106mmの装甲板を貫徹できました（傾斜角はすべて60度）。

なお、試作車および1944年8月頃までの初期生産型は4個の上部転輪を備えていました。また車体表面には、ツィメリットコーティングも施され、車

体側面のシュルツェン（補助装甲板）も標準装備とされました。そして1944年9月以降の生産車では上部転輪が3個になり、ツィメリットコーティングは廃止、実戦ではシュルツェンもほとんど装着されていなかったようです。

## ■ラングの戦歴

ラングの引き渡しが始まった頃、ドイツ軍では新たな機甲部隊として、パンサーを主力とした独立機甲旅団の編成が進められていました。当初ラングはこの新しい部隊の戦車猟兵中隊としてその第4中隊に配備されました。しかし、独立機甲旅団の編成は失敗で、ラングも1944年9月以降は、通常の機甲師団および機甲擲弾兵師団の、駆逐戦車大隊への配備が進められました。これらの中で最初にラングが配属されたのは、IV号駆逐戦車を装備してノルマンディで戦ったことでも知られた第116機甲師団でした。

ラングは有名な車輛にもかかわらず、出現時期が大戦末期の混乱の中であったこともあり、戦歴はあまり知られていません。そうした中でもラングの奮戦が伝えられるのが、1944年12月のアルデンヌの戦いでした。この戦いでは武装親衛隊第6機甲軍がドイツ軍の攻撃の主軸を担いましたが、その先鋒となった部隊のひとつが第12機甲師団「ヒトラー・ユーゲント」でした。

このとき師団の第12戦車連隊は第I大隊にパンサー38輛とIV号戦車39輛を装備し、第II大隊の代わりに第560重戦車駆逐大隊が配属されていました。同大隊はラング2個中隊とヤークトパンサー1個中隊の編成で、合わせて25輛が装備されていました。さらに師団の第12戦車駆逐大隊には、ラング22輛が装備されていました。

師団は12月17日にクリンケルト村を攻撃しましたが、この戦いには第12戦車駆逐大隊のラングが加わりました。ラングはその強力な主砲の威力を活かして、アメリカ陸軍第741戦車大隊のシャーマンをやすやすと撃ち取り、夕方にはアメリカ軍をクリンケルトに後退させました。さらにアメリカ軍戦線をすり抜けた、ツァイナー中尉の率いる第12戦車駆逐大隊第1中隊のIV号駆逐戦車3輛とおおよそ40名の擲弾兵は、敵陣深くロツヒェラートまで進出したのです。

彼らは村の中で襲いかかる第741戦車大隊のシャーマンを、殴り合いのような近接戦闘で撃ち取りました。しかし、後方との連絡は途絶え、全周防御の陣を敷くしかりませんでした。翌朝になってドイツ軍本隊の攻撃が始まり、ツァイナー戦闘は無事収容されました。この後第12機甲師団はビューゲンバッハを攻撃し、ラングも擲弾兵を支援して奮戦します。しかし、アメリカ軍の抵抗も激しく攻撃は失敗に終わりました。12月23日、師団は前線から引き上げられたのです。

アルデンヌの戦い以降、全戦線の状況は悪化の一途をたどりまし。ラングもその場その場の必要に応じて、各所の部隊に配属されました。絶望的な最後の戦いの中で、奔流となって襲いかかる敵戦車の大群に飲み込まれつつ、その性能を活かしてしばしば敵戦車に手痛い打撃を負わせ、その最後の光芒を放ったのです。

## ■IV号駆逐戦車/70(V) ラング諸元

- 全長：8,600mm、●全幅：3,170mm、●全高：1,960mm
- 戦闘重量：25.8トン、●乗員：4名
- エンジン：マイバッハHL120TRM
- 4ストロークV型12気筒液冷ガソリンエンジン
- 出力：265馬力/2600回転、●最大速度：35km/h
- 航続距離：210km(路上)
- 武装：7.5cm Pak42対戦車砲 (L/70) ×1、7.92mm MG42機関銃×1
- 弾薬搭載数：55発
- 装甲厚：車体前面80mm、側面30mm、後面20mm、戦闘室前面80mm、側面40mm、後面30mm

解説：斎木 伸生



「1944年9月以降の量産車輛」

### ■ The Birth of the German Tank Destroyer

The unexpected encounter of powerful tanks such as the T34 and KV in the early stages after the German invasion of Russia in 1941 caught German forces off guard. Their Sturmgeschütz (StuG) III assault gun achieved relative success, however, using its low silhouette and refined battlefield tactics to overcome an underpowered 7.5cm main gun. Encouraged, military planners evolved the StuG III to use a longer barreled gun starting with the Ausf.F in March 1942, and pressed it into combat with enemy tanks, making it de facto the first German tank destroyer.

### ■ Development of the Jagdpanzer IV

In September 1942, German company Vomag was ordered to develop a vehicle prototype combining the new Panzer IV chassis and the same Pak 39 L/48 7.5cm anti-tank gun as the StuG III Ausf.F. Two prototypes were developed. The first, in May 1943, utilized an unmodified Panzer IV chassis; that October a second was presented with a host of changes to the Panzer IV to incorporate the gun, and the vehicle (later named Jagdpanzer IV Ausf.F) was given the green light. Production started in December that year with the first vehicles delivered the following January. In total, 750 were manufactured by November 1944.

The Jagdpanzer IV's enclosed fighting compartment had limited rotation. It featured a wedge-shaped front which housed the transmission, and sloped armor on all sides: 60mm (later upgraded to 80mm) on the front, 40mm on the sides and 30mm on the rear. A "saukopf" (literally, pig's head) gun mantlet provided excellent protection. The L/48 7.5cm gun could defeat 96mm of 60-degree armor at 500m, 85mm at 1,000m and 64mm at 2,000m. A muzzle brake was originally attached but later removed to correct the vehicle's balance.

### ■ Evolution of the Lang Variant

When development of the Jagdpanzer IV kicked off in September 1942, use of the longer, then-under development L/70 7.5cm gun had been debated yet ultimately rejected due to concerns over possible delays caused to vehicle production. However, this decision was reversed in January 1944, with production commissioned of a Jagdpanzer IV Ausf.F "Lang" variant employing the L/70 7.5cm Pak 42. Manufacture of the Jagdpanzer IV /70(V) commenced that July, and would run to 930 vehicles by the time it halted in March 1945. Units started receiving them from August 1944. The (V) notated the variant's production by Vomag.

The Lang's longer-barreled gun could pierce 124mm of 60-degree armor from 500m, 111mm from 1,000m and 89mm from 2,000m. These figures improved to 174mm, 149mm and 106mm

### ■ Die Geburt des Deutschen Panzerjägers

Das unerwartete Auftreten von schweren Panzern, wie T34 und KV 1 in den ersten Tagen nach dem Angriff auf Russland im Jahr 1941 traf die Wehrmacht ohne Schutz. Ihr Sturmgeschütz (StuG) III erreichte einiges, vor allem weil man die flache Form und überlegene Taktik nutzte um die zu schwache 7,5cm Kanone auszugleichen. Dadurch ermutigt entwickelten die militärischen Planer im März 1942 ein Sturmgeschütz III mit längerer Kanone als Ausführung F. Sie warfen den neuen Panzer sofort in die Schlacht mit den Feindpanzern und schufen so eigentlich den ersten Deutschen Jagdpanzer.

### ■ Entwicklung des Jagdpanzer IV

Im September 1942 erhielt die Firma VOMAG den Auftrag ein neues Fahrzeug zu entwickeln auf der Basis des neuen Panzer IV Chassis und mit der Pak 39L/48 7,5cm Kanone des StuG III Ausf.F. Zwei Prototypen wurden gebaut. Der erste im Mai 1943 nutzte ein unverändertes Panzer IV Chassis, worauf im Oktober der zweite Prototyp eine Menge Verbesserungen aufwies um die Kanone aufzunehmen. Dieses Fahrzeug, später Jagdpanzer IV Ausf.F genannt erhielt, grünes Licht. Die Produktion startete im Dezember desselben Jahres und im Januar des darauf folgenden Jahres erreichten die ersten Fahrzeuge die Truppe. Bis November 1944 wurden 750 Fahrzeuge gebaut.

Der enge Kampfraum des Jagdpanzer IV erlaubte nur eine begrenzte Richtbewegung in der Seite. Sein stufenförmiges Vorderteil beherbergte das Getriebe und die Panzerung war schräg montiert mit 60mm (später verbessert auf 80mm) an der Front, 40mm an den Seiten und 30mm hinten. Die sogenannte „Saukopfblende“, bot hervorragenden Schutz. Die L/48 7,5cm Kanone konnte auf 500m eine Panzerung von 96mm durchschlagen, auf 1000m eine mit 85mm und auf 2000m eine Panzerung bis 64mm. Eine Mündungsbremse war ursprünglich montiert, wurde aber später weggelassen um die Gewichtsverteilung zu verbessern.

### ■ Entwicklung der langen Variante

Bei der Entwicklung des Jagdpanzer IV wurde erwogen, die noch in Erprobung befindliche L/70 7,5cm Kanone zu verwenden. Dieser Vorschlag wurde aber abgelehnt um Verzögerungen in der Produktion zu vermeiden. Wie auch immer wurde diese Entscheidung im Januar 1944 zurückgenommen und der Bau eines Jagdpanzer IV Ausf.F „Lang“, mit der L/70 7,5cm Pak 42 befohlen. Der Bau der Jagdpanzer IV / 70(V) begann im Juli und schaffte den Bau von 930 Fahrzeugen bis zum Ende der Produktion im März 1944. Die Einheiten erhielten die Fahrzeuge ab August 1944. Das „V“, in der Bezeichnung der Variante wies auf den Hersteller VOMAG hin.

Die Kanone der Langversion konnte eine Panzerung von 124mm, angewinkelt auf 60 Grad bis 500m durchschlagen, 111mm bis 1000m und 89mm bis 2000m. Diese Leistung wurde noch auf

### ■ Naissance du Chasseur de Chars Allemand

L'opposition inattendue des tanks puissants et bien protégés T34 et KV au début de l'invasion de la Russie en 1941 a pris de cours les forces allemandes. Leurs canons d'assaut Sturmgeschütz (StuG) III obtinrent cependant des succès relatifs en compensant la faiblesse de leur canon de 75mm par leur silhouette basse et leurs tactiques de combat évoluées. Encouragés par ces résultats, les allemands firent évoluer le StuG III en l'équipant d'un canon à tube long à partir de l'Ausf.F en 1942 et l'engageant face aux tanks ennemis, en faisant de facto le premier chasseur de chars allemand.

### ■ Développement du Jagdpanzer IV

En Septembre 1942, la firme allemande Vomag reçut instruction de développer un véhicule associant le châssis du Panzer IV et le canon anti-char Pak 39 L/48 7,5cm déjà installé sur le StuG III Ausf.F. Deux prototypes furent réalisés. Le premier, en mai 1943, utilisait un châssis de Panzer IV non modifié ; le second, en septembre comportait de multiples modifications pour intégrer le canon. Désigné ultérieurement Jagdpanzer IV Ausf.F, ce deuxième prototype fut retenu pour la production en série qui débuta en décembre de la même année, les premiers engins étant livrés en janvier suivant. Au total, 750 furent produits jusque novembre 1944.

Le compartiment de combat fermé du Jagdpanzer IV avait une rotation limitée. Il comportait un avant en biseau qui abritait la transmission et des blindages inclinés sur toutes les faces : 60mm (puis 80mm) à l'avant, 40mm sur les côtés et 30mm à l'arrière. Un masque de canon "Saukopf" (gros de cochon) assurait une excellente protection. Le canon L/48 7,5cm pouvait percer 96mm de blindage incliné à 60 degrés à une distance de 500m, 85mm à 1,000m et 64mm à 2,000m. Le frein de bouche installé à l'origine fut ensuite enlevé pour une meilleure répartition des masses du véhicule.

### ■ Evolution de la Version "Lang"

Au lancement du projet Jagdpanzer IV en septembre 1942, il avait été envisagé l'installation du canon L/70 7,5cm alors en développement mais cette option ne fut pas retenue afin de ne pas retarder la production des véhicules. Cependant, en janvier 1944 fut décidée la construction de la version Jagdpanzer IV Ausf.F "Lang" équipée du canon L/70 7,5cm Pak 42. La production du Jagdpanzer IV /70(V) commença en juillet et totalisera 930 exemplaires jusque mars 1945. Les unités commencèrent à le percevoir à partir d'août 1944. Le (V) de la désignation indiquait la production par Vomag.

Le canon à tube plus long du "Lang" pouvait percer 124mm de blindage incliné à 60 degrés à une

respectivement with seldom-employed high velocity rounds.

Early production (up to August 1944) Langs used 4 return rollers; as standard they had Zimmerit coating applied and were equipped with Schürzen additional armor plates. Those produced from September onwards had 3 return rollers; Zimmerit was no longer applied as part of a general policy, and Schürzen were largely eschewed in battle.

### ■ The Lang in Service

From September 1944 onwards the Lang was deployed by tank destroyer battalions in standard panzer or panzer grenadier divisions. Its first such unit was the 116th Panzer Division. Perhaps some of the vehicle's most notable actions came as a part of the 12th Panzer Division during the Battle of the Bulge in 1944. The 12th included 25 Langs from the 56th Heavy Tank Destroyer Battalion and 22 more in the 12th Tank Destroyer Battalion. 12th Battalion Langs made light work of U.S. Army 741st Tank Battalion Shermans in capturing Krinkelt, Belgium on December 17th. Three Jagdpanzer IVs and forty grenadiers of the 1st Company under the leadership of First Lieutenant Zeiner continued on to neighboring Rocherath, which they took from the 741st Battalion and held until relieved the next morning, despite being isolated and surrounded. Langs were also a part of the failed 12th Division offensive on Bütgenbach.

As the German situation deteriorated after the Battle of the Bulge, the Lang was used in a range of situations by various units, proving its effectiveness despite the ultimate defeat.

### ■ Jagdpanzer IV /70(V) Lang Specifications

- Length: 8,600mm ●Width: 3,170mm ●Height: 1,960mm
- Fully-Loaded Weight: 25.8 tons ●Crew: 4
- Engine: Maybach HL120TRM liquid-cooled 4-stroke V12 gasoline engine
- Maximum Output: 265hp (at 2,600rpm)
- Maximum Speed: 35km/h ●Range: 210km (road surfaces)
- Armament: 7.5cm Pak42 (L/70) anti-tank gun x1 (55 rounds), 7.92mm MG42 machine gun x1
- Hull Armor: 80mm (front), 30mm (sides), 20mm (rear)
- Fighting Compartment Armor: 80mm (front), 40mm (sides), 30mm (rear)

174mm, 149mm and 106mm gesteuert; allerdings mit der raren Hochgeschwindigkeitsmunition. Die Fahrzeuge der frühen Produktion (bis August 1944) hatten 4 Stützrollen und waren generell mit Zimmerit geschützt und mit Seitenschürzen. Die ab September produzierten hatten nur noch 3 Stützrollen und Zimmerit wurde nicht mehr grundsätzlich aufgebracht. Die Schürzen wurden oft im Gefecht verformt oder verloren.

### ■ Die Langversion im Einsatz

Ab September 1944 wurden die Langversionen in den Panzerjäger-Bataillonen der Panzer- oder Panzergrenadier-Divisionen eingesetzt. Die erste Einheit war die 116te Panzer-Division. Einige der bekanntesten Einsätze wurden während der Ardennenoffensive im Jahr 1944 von der 12. Panzer-Division gefahren. Die 12. Division hatte 25 Langversionen bei dem 560. Schwere Panzerjäger-Bataillon und 22 im 12. Panzerjäger-Bataillon. Die Langversionen des 12. Bataillons machten kurzen Prozess mit den Shermans des 741. Panzer-Bataillons der Amerikaner und eroberten Krinkelt in Belgien am 17. Dezember. Drei Langversionen und 40 Grenadiere der 1. Kompanie unter der Führung von Oberleutnant Zeiner stießen weiter nach Rocherath vor, eroberten es gegen das 741. Bataillon und hielten es bis zum nächsten Morgen obwohl sie von den eigenen Truppen abgeschnitten und eingekesselt waren. Die Langversionen nahmen auch am fehlgeschlagenen Angriff der 12. Division auf Bütgenbach teil.

Als sich die Lage der Wehrmacht nach der Ardennenoffensive auflöste wurden die Langversionen durch verschiedene Einheiten genutzt und bewiesen ihre Kampfkraft bis zum endgültigen Zusammenbruch.

### ■ Jagdpanzer IV /70(V) Lang Technische Daten

- Länge: 8,600mm ●Breite: 3,170mm ●Höhe: 1,960mm
- Gefechts-gewicht: 25,8 tons ●Besatzung: 4
- Motor: Maybach HL120TRM flüssigkeitsgekühlter 12 Zylinder Benzinmotor
- Leistung: 265hp (bei 2,600 U/min)
- Höchstgeschwindigkeit: 35km/h
- Fahrbereich: 210km (auf Strasse)
- Bewaffnung: 7,5cm Pak42 (L/70) Kanone x1 (55 Schuss), 7,92mm MG42 Maschinengewehr x1
- Schutz der Wanne: 80mm (vorne), 30mm (seitlich), 20mm (hinten)
- Schutz des Kampfraumes: 80mm (vorne), 40mm (seitlich), 30mm (hinten)

distance de 500m, 111mm à 1.000m et 89mm à 2.000m. Ces valeurs passaient à 174mm, 149mm et 106mm respectivement avec des munitions à haute vélocité rarement employées. Les Lang de début de production (jusqu'août 1944) avaient quatre galets de retour ; ils étaient recouverts de Zimmerit et étaient équipés de plaques de blindage additionnelles (Schürzen). Ceux produits à partir de septembre avaient trois galets de retour ; la Zimmerit n'était plus appliquée et les Schürzen plus installées au combat.

### ■ Le "Lang" en Service

A partir de septembre 1944, le "Lang" fut déployé dans des bataillons de chasseurs de chars au sein de divisions de Panzer ou Panzergrenadiers, la première étant la 116<sup>ème</sup> Panzer Division. Les actions de combat les plus notables sont celles d'engins de la 12<sup>ème</sup> Panzer Division durant la Bataille des Ardennes fin 1944. La 12<sup>ème</sup> disposait des 25 "Lang" du 560<sup>ème</sup> Bataillon de Chasseurs de Chars Lourds et des 22 "Lang" du 12<sup>ème</sup> Bataillon de Chasseurs de Chars. Ces derniers virent rapidement à bout des Sherman du 741<sup>ème</sup> Bataillon de Chars de l'U.S. Army en capturant Krinkelt en Belgique le 17 décembre. Trois Jagdpanzer IV et quarante grenadiers de la 1<sup>ère</sup> compagnie sous le commandement du Lieutenant Zeiner poursuivirent vers Rocherath qui fut repris au 741<sup>ème</sup> Bataillon US et tinrent la position jusqu'au matin suivant bien qu'ils fussent isolés et encerclés. Des "Lang" participèrent également à l'offensive avortée de la 12<sup>ème</sup> Division sur Bütgenbach.

La situation allemande se détériorant après la Bataille des Ardennes, les "Lang" furent utilisés en de multiples occasions par diverses unités, prouvant leur efficacité malgré l'inéluctable défaite.

### ■ Caractéristiques du Jagdpanzer IV /70(V) Lang

- Longueur: 8,600mm ●Largeur: 3,170mm ●Hauteur: 1,960mm
- Poids en ordre de combat: 25,8 tonnes ●Equipage: 4
- Moteur: V12 essence 4 temps Maybach HL120TRM refroidi par liquide
- Puissance maxi: 265cv (à 2.600 tr/min.)
- Vitesse maxi: 35km/h ●Autonomie: 210km (sur route)
- Armement: canon anti-char 7,5cm Pak42 (L/70) x1 (55 coups), mitrailleuse 7,92mm MG42 x1
- Blindage de caisse: 80mm (avant), 30mm (côtés), 20mm (arrière)
- Blindage de compartiment de combat: 80mm (avant), 40mm (côtés), 30mm (arrière)